序　文

2012 年 8 月 22–24 日の 3 日間にわたり、デンマークの首都コペンハーゲンにおいて、コペンハーゲン大学日本学科ならびにアジアン・ダイナミクス・イニシアティブ（ADI）との共催により、国際日本文化研究センター（日文研）第 19 回海外シンポジウム「『日本研究』再考――北欧の実践から」（Rethinking “Japanese Studies,” from Practices in the Nordic Region）が開催されました。この論集は、同シンポジウムでの講演・発表のために準備され、当日の議論を経て参加者各位がまとめ直された論文を収録したものです。

日文研は、そのミッションに従い、日本研究を通じたさらなる学術交流の促進を目的として、1995 年度から毎年、世界の異なる地域で海外シンポジウムを開催してきましたが、昨年度、初めて北欧でこれを実現することができました。開催国デンマークのみならず、スカンディナビア各地に拠点を持つ第一線の日本研究者に広くお集まりいただき、日本、さらには他の地域の研究者との間で議論を深め、今後に続くネットワークを築く場とすること、同時に、通常は必ずしも頻繁でないと聞く、域内研究者どうしの学術交流の機会を提供することを、大きな目的として掲げましたが、全関係者のご協力をもって、それをよく達成することができたと考えております。

開催の前年、本シンポジウムの準備のため、担当者として北欧および近隣諸国を回り、現地の日本研究状況を勉強させていただいた折、きわめて印象的だったのは、各国の主要大学を中心に、従来の学問領域や縦割りの地域研究を超えようとする日本研究者たちの果敢な挑戦が、目に見える形で進行している様子でした。日本研究の歴史が厚く研究者人口も多い米国や、西欧のいくつかの国々と異なり、地理的にもそれらの中心から離れた北欧地域だからこそ、新しい枠組みでの研究を試行しやすい、そこに自分たちの環境の利点を見出していきたいとの声も聞かれました。次世代の研究者たちもまた、そうした信念のもとに熱意を込めて育成されていることが、手に取るように感じられました。

「北欧の実践から」、「日本研究」を「再考する」、という本シンポジウムの大テーマは、そこから生まれたものです。また、そのもとでの二つのセッション「テキストと空間の新しい読みをめぐって――宗教からポピュラー・カルチャーまで」「日本とヨーロッパ――グローバル化された『日本研究』に向けて」は、現地で実際に活躍しておられる方々の持つ具体的な研究テーマを最大限に生かし、その方向性に光を当てることを考えて設定されました。日文研内に設けられた第 19 回海外シンポジウム実行委員会では、こうした内容を導き出す過程で、山田奨治委員長（シンポジウム開催時の委員長は、山田教授海外研修のため、劉建輝教授に交代）のもと、熱く有意義な議論が重ねられましたが、それもまた、北欧で日本研究に従事しておられる方々の熱意を反映したものであったと思います。

シンポジウムの場で、大小の論点をめぐり活発な議論が行われたことは言うまでもありませんが、「『日本研究』再考」という大きな問題については、「日本」という素材に研究の焦点を定めつつも、それを一つの場、もしくは事例として、世界大の関心の中で相

対化していく意識が重要であるとの考え方が、さまざまな角度から示唆されました。本論集の編集にあたっては、二つのセッションによるシンポジウムの構成をそのまま継承しつつも、自由討論を含めた会議それ自体とは異なる紙上の編纂物として、そうした議論の方向性がよりよく伝わるよう、当日のプログラムから掲載順を若干変更するなどの工夫をいたしました。なお、各セッションのコンヴィーナーを務められたマーク・テーウェン、長島要一の各氏による「ミニ・キーノート・レクチャー」、ならびに、共催校を代表してレセプションを催してくださった、コペンハーゲン大学ウルフ・ヒデトフト人文学部長のウェルカム・スピーチに関しては、ご本人の了解を得て、当日の原稿をそのまま収録しております。

最後に、本冊の執筆者ないしシンポジウムでの発表者各位はもとより、当日の議論にコメンテーター、または、ディスカッサントとしてご参加いただいた皆さまへ、あらためて御礼申し上げます（お名前は巻末のシンポジウム・プログラムに掲載されています）。また、シンポジウム開催まで長期にわたり、現地側の準備をすべて引き受けてくださった、コペンハーゲン大学の長島要一教授、同大学アジアン・ダイナミクス・イニシアティブを本事業参画へと導かれたマリー・ロースゴー運営委員長、そして、細部にわたり万全の運営をしてくださった同イニシアティブ専属コーディネーター、マリー・ヨシダさんへの感謝を込めて、ここにお名前を記させていただきます。そして日文研においては、研究協力課国際事業係の幸俊烈係長、同係・岡村友章さんのご尽力がなければ、シンポジウムの開催から論集出版までを含め、本事業は実現しませんでした。出版のための作業にはさらに、資料課出版編集室・白石恵理さんのお力が欠かせませんでした。

多くの方々とのチームワークを経て、日本研究の持つ可能性を見直す試みの詰まったこの論集を、こうして読者のもとにお届けできることをうれしく存じます。

佐野真由子
国際日本文化研究センター 海外研究交流室 准教授
第 19 回海外シンポジウム実行委員